

# 幼児の「人とかかわる力」を育む視点から、 幼児の言動の理解と援助についての一考察

A study on understanding and supporting child behavior through the view point of  
developing their ability to relate with others.

次世代教育学部こども発達学科

中道 美鶴

NAKAMICHI, Mitsuru

Department of Child Development

Faculty of Education for Future Generations

キーワード：人とかかわる力，領域「人間関係」，幼児理解，保育援助

要旨：幼児の「人とかかわる力」は，領域「人間関係」の中の柱であるが，この領域の幼児の発達の姿や援助について，今まで十分に研究されてきたとは言えない。保育の現場でもその理解と指導方法は一貫しておらず，論の分かれるところである。本稿では，筆者が採取した4つのエピソードを再考察することで援助の在り方を検討した。「幼児の表面的な言動に惑わされることなく，本質を見抜く目と感性を最大限に発揮して幼児を理解すること」から，「今，その場で幼児と保育者がどうするかだけでなく，幼児の内面に何を積み上げていくかを考えた援助」が見えてくる。

**Keywords:** ability to relate with others, contents of childcare “personal relationships”, understanding a child, childcare and education

## I. はじめに

子どもが育つ社会において，情報化が進めば進む程，直接的な人間関係は希薄になっていくと考えられる。幼児の「人とかかわる力」が，人と直に触れ合い，関わり，感じる中で豊かに育っていくということからすれば，正に育つ機会が減少してきていると言える。そうした社会状況の中で，幼稚園や保育所が果たす責務はますます拡大してきている。

しかし，幼稚園や保育所でただ単に集団保育を受け，人とかかわる体験を積みば「人とかかわる力」が育つかと言えば，そうではない。集団の中で幼児がどのような体験をするか，どのような感情体験をするかという幼児の体験の質が問われる。幼稚園教育要領・保育所保育指針でも，表面的な活動の体験ではなく，内面の育ち，内面に積み上げる過程を重視している。適切な人的・物的環境が保障され，幼児期にふさわしい生活が展開される集団の中で，保育者の適切な援助の下に質のよい体験が積み上げられることによって豊かに育っていくと考える。

この稿では，幼児の「人とかかわる力」を育むとい

う視点から，幼児の言動を保育者がどのように理解し援助をしていけばよいか，そのあり方を，筆者がかつて幼稚園現場で採取したエピソードを再考察することで明確にしたい。

## II. 幼稚園教育要領改訂の際に見えた領域「人間関係」の重要性

近年多発しているいじめや子どもの自殺事件は，大変残念なことだが，子どもが育つ地域環境や家庭環境，人々の価値観が大きく変化し，人とかかわる体験が希薄になってきていることが大きな要因であると指摘されている（入江，2008）。幼児の人とかかわる力が育ちにくくなってきているのである。

幼稚園教育要領・保育所保育指針の領域「人間関係」は，『他の人と親しみ，支え合って生活するために，自立心を育て，人とかかわる力を養う（下線筆者）』領域であると明示されているように，幼稚園や保育所でも，幼児の「人とかかわる力」を育てるということの重要性に着目するようになってきた。

1989年の教育要領改訂の際に，それまで領域「社

会」で扱われていた内容が「人間関係」に焦点化した形で5つの内の1つの領域として設定された。人間関係は本来人的環境という意味では領域「環境」に含まれると考えられるが、「乳幼児期の人間関係の発達はこの時期の子どもにとって重要であることから環境とは別に人間環境の領域が設けられた（永野，2007）」と考えられる。改訂の際に、文部省（当時）初等中等教育局長菱村（1989）が、教育要領の改訂について、その目的を「社会の変化とそれに伴う幼児の生活や意識の変容に配慮しつつ、…中略…社会の変化に自ら対応できる心豊かな人間の育成を図ること」と、幼稚園教育指導書（文部省，1989）の“まえがき”で述べている。このことから、社会の変化の中で子どもも変化してきていることを考慮した改訂だったことが窺える。時代の変化から、幼稚園・保育所で幼児期に「人間関係（人とのかかわる力）」の基礎を育むことの重要性が一層クローズアップされたのである。

しかし、永野（2007）が、「保育内容『人間関係』に関する研究の動向」の中で、1989年以降の日本保育学会で発表された保育内容「人間関係」についての調査結果を報告しているが、「各年度とも数件から十数件の発表にとどまり、活発に研究されているとは言えない（永野，2007）」と述べている。実際に保育現場でも研究・研修が進んでいないため、領域「人間関係」の理解と指導方法は、一貫しておらず、保育者の考え方によって援助のあり方が真逆のことも多い。

様々な見方・考え方がある中で、筆者は、前項でも述べたように、表面的な活動の体験ではなく、幼児の内面の育ち、内面に積み上げる過程を重視して援助する仕方に照準を合わせたいと考える。

### Ⅲ. 保育援助のあり方を検討する必要性

幼稚園教育要領1999年の改訂で、幼稚園教育の基本として、遊びを中心とした環境を通して行う教育であることを明示し、重視すべきこととして、

- 幼児期にふさわしい生活が展開されるようにすること
- 遊びを通しての総合的な指導が行われるようにすること
- 一人一人の特性に応じた指導を行うようにすること

の3点を挙げている。そして、このことは、1999年の

改訂、2008年の改訂でも変わらず引き継がれてきている。

このことは、『遊びを中心とした幼児期にふさわしい生活の中で、幼児が主体的に活動しながらねらいを達成していくのを、幼児の特性に応じながら総合的に指導していくことが保育者の責務である』と換言できる。従って、幼児への指導は、生活の中の必然的・偶然的な様々な場面を捉えて、ねらい・内容を念頭に行うことになる。しかしながら、幼稚園教育要領・保育所保育指針には、指導の各場面において保育者の姿勢や心構え、内容の取扱いについては記述されているものの、どのように援助すればよいかの具体的記述はなく、現場で保育に当たるものに委ねられている。そのため、援助のあり方が、保育者の幼児観・発達観・保育観等に左右されることになる。

このようなことから、保育現場では、エピソードに基づいた研修によって、一貫性のある指導を目指すべく努力をしている。そのことを、岡花（2010）は、『『エピソード記述』による幼児理解に関する研究』の中で、鯨岡（2005）のエピソード記述法や、ショーン（2001）の反省的実践家モデルを例示して、実践記録による教育実践の省察が注目を集めてきていることを述べており、幼稚園や保育所の生活の中で捉えた幼児の言動をどのように理解し、援助すれば幼児を望ましい育ちへと導くことができるかを検討することの必要性を裏付けている。

本稿でも、筆者が幼稚園現場で採取したエピソードを再考察することにより、幼児の内面に積み上げる育ちを重視した援助のあり方を探っていく。

### Ⅳ. 幼児の「人とのかかわる力」の捉え方

幼稚園教育要領解説（文部科学省，2008）第2章、第2節、2. 人とのかかわりに関する領域「人間関係」では、人とのかかわる力を育てるために、幼稚園生活において必要な習慣や態度として次のものを挙げている。

- 保育者との信頼関係を基盤に味わう自分の力で  
行う充実感や満足感
- 自分の感情や意志を表現しながら、自己の存在感や他の人々と共に活動する楽しさを味わうこと
- 幼児同士の自己主張のぶつかり合いによる葛藤などを通して互いに理解し合う体験を重ね、共

感や思いやりなどをもつようになること

○よいことや悪いことに気付き、考えながら行動したり、きまりの大切さに気付き、守ろうとしたりすること

そして、そのために幼児自身が経験したり、身に付けたりする必要のある13の内容を挙げている。その中には、

- ・身近な人たちとの信頼関係や思いやりに関するもの
- ・自分自身の存在感や自信、自立心、責任感、自己表出、自己受容など自身に関するもの（下線筆者）
- ・友達とのかかわりや共感、友達との葛藤、自己発揮と自己抑制の調和、他者受容、関係性構築に関するもの

等の要素が含まれており、人とかかわる力は、自分自身とかかわる力という課題も含まれていることが分かる。

このことは、野田（2005）も「保育内容の再考－領域『人間関係』のねらいを視点として」を主題にした研究の中で次のように注目している。野田は、領域『人間関係』の捉え方として次のように述べている。

領域『人間関係』は、人とかかわりに関する領域とされていることから、他者とかかわりの部分だけが取り上げられがちであるが、第1のねらいは、自分で行動することの充実感、つまり「個」としての充実が挙げられていることに注目したい（野田、2005）。

筆者もこのことに注目しており、幼児が自分と向き合い、自己を統制していく経験を積むことが、人とかかわる力の基盤になると考えている。

従って、日常生活の中で幼児が見せる友達との関係や葛藤だけでなく、幼児の自分自身の理解や統制ということにも目を向けていく必要があり、そのことが、領域「人間関係」のねらいの解説や、ねらいに対する内容の解説にも、「自分の感情や意志を表現しながら、自己の存在感や他の人々と共に活動する楽しさを味わい…（略）」などと、多く記述されている。

本稿では、幼児の「人とかかわる力」の中で、「友達との関係や葛藤」と、「幼児の自己理解や自己統制」の両視点から論じることにする。

## V. 事例検討及び考察

幼児の「人とかかわる力」の中でも、前項で述べた（1）友達との関係や葛藤に焦点を当てる幼児理解と援助、（2）幼児の自己理解や自己統制に焦点を当てる幼児理解と援助の2方向からエピソードを考察することとする。

### （1）友達との関係や葛藤に焦点を当てる幼児理解と援助

#### エピソード① 【私が先よ！】

2年保育4歳児5月、A子とB子は仲良しで、入園当初からよく一緒に遊んでいた。A子は勝気で思い通りにならないと大泣きして自己主張する。言葉で気持ちを表現することは、どちらかと言えば苦手である。B子も勝気で、思い通りにならないと相手を言い負かそうときついことを言うので激しい喧嘩になることがある。

この日は二人とも園庭でままごとをしていた。本物の包丁や食器を使うままごとには人気が集まって、混雑していた。A子がままごと道具の中から陶器の急須を見つけて手を伸ばしたとき、B子も同時に手をのぼしてきたので取り合いになる。二人は急須を引っ張り合いながら絶対に譲らない。予想通り蓋が落ちて割れる。二人は一瞬蓋に目をやったが、それでも手を離さない。保育者は、割れた蓋が危なくないように距離を置かせる。その後A子の手が急須から離れた。A子は泣き止む。

それを見ていた5歳児女児が、よく似たポットを持ってきてA子に渡す。A子は気に入ったようで、泣き止んで遊びを再開した。B子はそのやり取りを見ながら蓋のない急須で遊ぼうとしたが、後味が悪かったのか、A子に譲ろうと差し出す。A子が「要らない」と言ったので、B子はしょんぼりと引っ込める。

二人が落ち着いたところで蓋が割れたことへの責任について話し合う。どちらともなく「ごめんさい」と謝ったので、保育者も取り巻きの幼児たちも二人と一緒に解決した安心感を味わう。

#### ＝この時の保育者の判断＝

\* A子とB子は普段仲が良く、お互いに遠慮のない間柄である。二人とも自己主張はよくするが、相手の気持ちを考えて自分を抑制することは苦手な方である。

\* お互いの意地がぶつかり合う経験は、二人の育ちの上からも貴重なものになるだろう。

⇒ 保育者は以上のように判断し、危険がないことを確認しながら二人を見守った。

#### 〈考察〉

一瞬、急須が割れるかも知れないと感じながら介入しないで見守った。蓋だけでも外せばとも思ったが、声を掛ければ保育者の意図を感じ取ってどちらかが譲

るといふことも考えられたので、二人の気持ちが正面衝突している状況を見守る方向で援助した。その中で二人と周囲の幼児が、人それぞれ思いがあることや、一つしかないものは譲り合うしかないのだということを感じ取ったのではないかと思う。

お互いが主張しているときには急須が欲しいというより、意地と意地がぶつかり絶対に譲りたくないという思いに支配されていたが、どちらかが執着しなくなった時点で、相手にとってもそんなに欲しいものではなくなくなったようである。そして、落ち着いたときに後味の悪さを経験したのではないかと思う。

入江（2008）は、「保育者の遊び提示による年中児の人間関係の質的変容」の中で、大森・友定（2000）の論を引用し、「年中児の人間関係の形成はその子なりの矛盾や葛藤を体験し、それらを乗り越えながら形成されていく」と述べている。4歳児のA子とB子は、意地を張っていたときの苦しさ、奪われたときの悔しさ、奪ったときの後ろめたさなど、様々な感情を体験したと思われる。これらの感情体験が、自分との付き合い方や他者との距離のとり方を調整する力として幼児の内面に積み重なっていくのではないだろうか。

## エピソード② 【よく我慢したね】

C児は、自転車に乗れるようになり、毎朝楽しみに登園している。この日も登園すると持ち物をさっさと片付け、園庭へ直行した。しかし、数台ある自転車は全て友達が使用中で、倉庫の中には1台も残っていない。C児はそれでもあきらめられず、自転車に乗っている友達に代わってもらおうと交渉に行った。C児はどちらかと言えば、強引に割り込むような面がある。保育者は（もしかしたら…）と予想をして見守っていた。

C児はD子に対して、「ねえねえ、自転車代わって」と頼んだ。D子は、「さっき乗ったばかりだからダメ」と断る。

次にC児は、E児に交渉する。「E君、自転車代わって」と言う。E児は「ダメ、次はF君が乗るから」と断る。G子にもH児にも聞いてみるが、全て交渉不成立。C児は、仕方なく自転車を諦めて砂場へ行き、他の友達と遊び始める。

保育者はC児に「自転車に乗りたかったのに、我慢したんだね」と声を掛ける。C児は砂場の穴掘りをしながら頷く。保育者が、「残念だったね」と再度声を掛けると、C児は「給食の後で乗る。一番に給食を食べて、早く外に出るから」と答える。保育者は、「そうなの」とC児の頭を撫でる。

### ＝この時の保育者の判断＝

- \* C児は、自転車を代わってもらいたいという気持ちを友達に言葉でうまく伝えている。
- \* 友達から断られたが、自転車に乗りたい気持ちを自分で抑制することができている。
- \* C児は、「先生、〇〇君が代わってくれないよ」と、

保育者の力を借りて乗りたい思いを実現させようとしたり、強引に割り込んだりすることが多いが、この日は乗りたい気持ちを砂場の遊びに転嫁している。

- \* C児のこの言動を認めることで、自信につながたい。周囲の友達にもC児のよい面を伝えたい。
- ⇒保育者は以上のように判断し、C児に声を掛けた。

### 〈考察〉

遊びの中で、順番争いや遊具の取り合いはよくある光景である。その際の保育者のかかわりによって、幼児が経験する感情は大きく違ってくる。

遊具の取り合いが起きたら、保育者が、「順番にしておうね」「代わりにこれはどう？」などと収める方向で援助する場面を目にすることが多い。しかし、それでは遊具を誰が使うか、順番はどうするかということだけを扱うことになり、そこで体験される幼児の気持ちは置き去りになってしまう。結果的に物を順番に使ったり、譲ったりする態度を育てることを目指すことに変わりはないが、その態度を裏打ちする幼児の気持ちを扱うことも大切なのではないかと考える。

C児のように自転車に乗りたいという気持ちを表出し、断られて我慢する体験を通して、感情統制の練習をすることが必要ではないだろうか。その練習に保育者が寄り添い幼児を支えることで育ちが促されるのだと思う。

C児は自転車に乗れず悔しく残念な気持ちを味わったが、保育者に「残念だったね」と声を掛けられ、頭を撫でられることによって、乗り越えられたと思われる。そして、自分にも我慢ができたという自信につながったのではないだろうか。

幼児は、このような体験の積み重ねによって、思い通りにいかないことがあっても自分なりに気持ちの処理をすることができるようになる。これが、友達とのかかわり方を学ぶということだと思う。

## (2) 幼児の自己理解や自己統制に焦点を当てる幼児理解と援助

### エピソード③ 【ぼくやってないもん！】

2年保育4歳児、普段、感情を表に出さないJ児が濡れ衣を着せられそうになってK児と掴み合いの喧嘩を始めた。入園以降初めて見せるJ児の姿に保育者は驚いてどうしたらよいのか一瞬迷ったが、あまりの凄まじさに引き離しに入る。しかし、互いに力と力を本気でぶつけ合い、とうとう怒りが沸騰してJ児はK児を引っ掻いてしまった。その直後J児は怒りのあまりもどしてしまい、顔は真っ赤で手も火照っている。

る。本気で怒っていることが伝わってくる。

周囲の幼児も濡れ衣だったことを認めている。しかし、K児は悪いと分かっているにもかかわらず素直になれないところがある。保育者がK児の代わりにJ児に謝り、時間を置くことにした。保護者に保育者の対応と意図を伝えておいた。

連休明けの翌々日の朝、保育者がJ児に声を掛けると、満面の笑顔でK児にひっかいたことを謝ったと話した。K児もすでに謝ったと言うので、「仲直りした時って気持ちがいいよね」と心地よさを共有した。

#### ＝この時の保育者の判断＝

- \* J児の怒り感情は生きていく上で自然に沸き起こってくるもの。
- \* J児が、体が震えるほどの強烈な怒りを味わい表出できたことは、J児にとって貴重な体験である。
- \* 怒りは封じ込めて成長するのではなく、怒りとどう付き合っていくかが大切である。
- \* 幼児期にしっかり怒りを感じ、それを表現し、時には相手を傷つける失敗をするかも知れないが、怒りを他者に受け入れられる方法で表現することを学びながら成長していく。

⇒保育者は以上のように判断し、保護者にも理解を求め、時間を掛けて幼児の育ちへと導いた。

#### 〈考察〉

順番を守ることや、悪いと思ったらすぐに謝ることも大切な指導内容ではあるが、そのことを先行させ過ぎると“気持ち”が置き去りになる。幼児が、友達との生活の中で人間臭い失敗や体験をしっかりすることを通して、自分の感情を自分で見つけ、少しずつ抱えることができるようになっていく。また、そうすることで、遠回りではあるが心から謝ることもできるようになり、友達と誠実に付き合うことのできる幼児に育っていくのではないかと思う。

臨床心理学者で臨床心理士の大河原（2006）が「怒りや悲しみ、恐怖や不安、憎しみ等の感情は身体に流れるエネルギーだ」と述べている。大河原はまた、「ネガティブな感情エネルギーの行き場がない状態で、子どもの中に仕舞っておいたら、気持ちの収め方が分からないまま育ってしまう」と警鐘を鳴らしている。大河原の論で言いかえると、J児の気持ち（ここでは悔しいという気持ち）は、自然に湧き起こってくるエネルギーなのである。保育者は、J児がそれを表出できたことを（+）に捉えた。怒りの感情を表出しながらJ児自身がそれをしっかり味わい、身体の中に居場所を作る作業が進んだものと思われる。

保育者は、幼児の言動にとらわれ過ぎないで、内面の感情や気持ちを読み取り、経験や失敗から育って

くのを支えることが大切である。

#### エピソード④ 【守ってくれてありがとう】

M児は、同年齢の幼児に比べて自己統制力が弱いので、ルールが守れなかったり、怒りを人や物にぶつけてしまったりすることがよくある。従って、注意されることが多く、友達からも（-）の見方をされ、自己肯定感はかなり低いようである。

この日、M児が友達とのトラブルから感情が高ぶり、泣き喚きながらカセット・デッキを置いたベンチをひっくり返そうとした。カセット・デッキをつかみ投げようになったが、次の瞬間カセット・デッキはそっと下に置いてからベンチをひっくり返した。

保育者が「カセット・デッキを守ってくれてありがとう」と声を掛けるとM児の泣き方が緩やかになった。

#### ＝この時の保育者の判断＝

- \* M児は、怒りを処理することができず、カセット・デッキを振り上げて物に当たろうとしているが、他の幼児との距離があり、当たる可能性はない。
- \* 高ぶった感情の中でも、カセット・デッキは大切なものだから投げてはいけないという冷静な部分がM児の中にある。
- \* ベンチをひっくり返したという（-）面に着眼するのではなく、大切なデッキを守ったという（+）面に目を向けることで、M児の自己肯定感を高めた。

⇒保育者は以上のように判断し、周囲の幼児にも聞こえることを意識しながらM児に声を掛けた。

その後もこのようなことが繰り返された。M児は次第に、怒りの処理を人や物に当たるのではなく、部屋を出てクール・ダウンする場所を見つけ、自分で立ち直るようになった。落ち着いたときに保育者がそっと肩を抱いたり、頭を撫でてたりして、心地よさを一緒に味わうようにした。

M児に仲良しの友達ができた。時には、喧嘩になって「もう知らん！」等と怒りが爆発することもあるが、また仲直りし、友達との仲は喧嘩しても壊れないことを体験している。

以前は自分自身の怒り感情に振り回されていたが、自分の力で乗り越えられるようになったことが自信となり、友達関係を支えていることを感じる。

#### 〈考察〉

自己肯定感の低いM児にとっては、このようなとき叱られる自分を想像していたかも知れない。悪いと分かっているにもかかわらず自分の怒りを止めることができにくいM児の行動の中で、（-）面のみに目を向けると、M児はますます追い込まれて自信を失っていきだろう。M児自身も気付いていない（+）面に焦点を当てたことで、保育者もM児を受け入れることができたし、M児

自身も褒められる自分を心地よく感じたのではないだろうか。幼児の行動のどこに思いを寄せていくかが、幼児の自己肯定感や自信、他児のM児に対する見方を大きく左右することになると思う。

Cohen, C. (2000) は著書『子どもの社会性づくり10のステップ』の中で、「怒り感情は、人間みんなが時々抱く正常で健全な感情であり、役に立つ感情である」と述べている。さらに、「怒りをコントロールされた形で表現する方法を身につけると、子どもは、怒り感情によって助けられていることが分かってくる(表1)」とも述べている。M児の怒り感情は切り捨てたり、仕舞い込んだりすべき嫌なものではなく、適切に表現する方法を獲得することによって、M児の大切な感情として持ち続けることができるのではないだろうか。

表1 「怒りは私たちが次の点で助けてくれるもの」  
(Cohen, C. 2000)

- 
- ・ 目標を達成する
  - ・ 健康を保つ
  - ・ 問題を徹底的に解決する
  - ・ 自分についてよりよく感じる
  - ・ 自分自身をよりよく理解する
  - ・ 自分の他者への要求がハッキリとしてくる
- 

## VI. 総合考察

本報告は、筆者が過去に採取したエピソードを再考察するという形で、幼児の「人とかかわる力」を育むという視点から、幼児の言動の理解と援助のあり方を明確にすることを試みた。

まず、①～④の4つのエピソードに流れている保育観は、「幼児の表面的な言動に惑わされることなく、本質を見抜く目と感性をフルに発揮して幼児を理解する」ことと「今その場で幼児と保育者がどうするかだけでなく、幼児の内面に何を積み上げていくかで援助の在り方を判断する」ということである。

「幼児の自己発揮と自己抑制の調和のとれた発達の上で、自己主張のぶつかり合う場面は重要な意味を持っていることを考慮して幼児に関わる必要がある」と、幼稚園教育要領解説に、保育者の援助の重要性が示されているが、エピソード①のA子とB子は、意地と意地が真正面にぶつかり合う経験の中から、意地を張っていたときの苦しさ、奪われたときの悔しさ、奪ったときの後ろめたさなど、様々な感情を

体験した。これらの感情体験が、自分との付き合い方や他者との距離のとり方を調整する力として幼児の内面に積み重なっていくのではないだろうか。

エピソード②のC児は、自転車に乗りたが誰にも代わってもらえなかったという辛い気持ちを抱えたまま他の遊びに参加した。遊んでいる内に気落ちが紛れることもあるが、保育者に、「我慢したんだね」と声を掛けられることによって自信になったと思われる。普段このような場面ではどちらかと言えば強引に割り込むことが多いC児が、その(-)感情を自分なりに処理することができた。その自信は、友達とのかかわり方に今後影響していくと思われる。

エピソード③では、普段感情を表出しないJ児が、身体が震えるほどの強烈な怒りを表出させた。怒りの感情を表出しながらJ児自身がそれをしっかり味わい、身体の中に居場所を作る作業が進んだものと思われる。

幼児が、友達との生活の中で人間臭い失敗や体験をしっかりとすることを通して、自分の感情を自分で見つめ、少しずつ抱えることができるようになっていく。また、そうすることで、遠回りではあるが心から謝ることもできるようになり、友達と誠実に付き合うことのできる幼児に育っていくのではないかと思う。

エピソード④では、自己肯定感の低いM児に対してできるだけ(+)の言葉を掛けたいと考えている保育者が、M児自身も気付いていない(+)面に目を向けたことでM児も自分の内面に気持ちを向けることができ、冷静さを取り戻していった。自分と向き合う体験が自己統制を促すのだと考える。

また、M児の怒り感情は切り捨てたり、仕舞い込んだりすべき嫌なものではなく、適切に表現する方法を獲得することによって、M児の大切な感情として持ち続けることができるのではないだろうか。

上記のエピソードの幼児たちが体験したように、様々な感情体験の積み重ねによって自分を知り、他者との距離を調整する力を育む。それが友達と仲間になる力であり、人とかかわる力の基礎となるものだと考える。

しかしながら、幼児の「人とかかわる力」が友達との葛藤や自己統制からだけ育つと考えている訳ではない。日常保育の中で数多く経験する楽しさ、嬉しさ、温かさなどがベースになっていることは言うまでもない。このような経験がある。4歳のある幼児が、保育者に「トマトの歌を歌って」とねだった。保育者が「…上から読んでもトマト、下から読んでもトマト

…」と歌うと喜んで、友達の名前で替え歌をねだってくる。「…上から読んだらみちこ（仮称）、下から読んだらこちみ」とそれにも応えると他児も大喜びで次々に要求してくる。1曲歌う毎に楽しさを味わいながら、みんなの心がつながっていることも味わっていた。このような体験から、幼児は人の温もりや仲間といることの喜びを感じ、人が好き、自分が好きだと感じるようになる。

ただ、このような（+）の感情が、怒りや辛さなどの（-）感情に阻まれてしまうことも否めない。（+）の感情体験が幼児の「人とかかわる力」として溜めこまれていくためにも、筆者が本稿で述べた（-）感情との付き合い方を体験から育んでいく必要があると考える。

#### 引用・参考文献

- Cohen, C. (2000) *Raise your child's social IQ*. Washington, D.C. (高橋りう司・益子洋人・芳村恭子 (訳) (2005). 子どもの社会性づくり10のステップ. 金子書房).
- 入江慶太 (2008), 「保育者の遊びの提示による人間関係の質的変容」, 幼年教育研究年報, 30, pp. 69-76.
- 神垣彬子 (2009), 「保育士養成校における領域『人間関係』の授業形態についての研究－子どもの人間関係の形成を効果的に援助・促進するために－」, 発達研究, 23, pp. 225-228.
- 厚生労働省 (2008), 「保育所保育指針解説書」, フレーベル館.
- 文部省 (1989), 「幼稚園教育指導書」, フレーベル館.
- 文部省 (1999), 「幼稚園教育要領解説」, フレーベル館.
- 文部科学省 (2008), 「幼稚園教育要領解説」, フレーベル館.
- 永野 泉 (2007), 「保育内容『人間関係』に関する研究の動向－日本保育学会の研究発表を中心に－」, 淑徳短期大学研究紀要, 46, pp. 33-42.
- 野田寿美子 (2005), 「保育内容の再考－領域『人間関係』のねらいを視点として」, 埼玉大学教育学部附属幼稚園研究紀要, pp. 1-90.
- 岡花祈一郎 (2010), 「『エピソード記述』による幼児理解に関する研究－保育内容言葉との関連を中心に－」, 広島大学大学院教育学研究科紀要第三部, 59, pp. 153-159.
- 大河原美以 (2004), 「怒りをコントロールできない子